

保幼小接続・連携を担う保育士と教員養成の実践 —教育学部・総合演習における森林環境教育を目指した プロジェクト型学習を通じて—

Practice of training nursery teachers and teachers with a view to connecting
and collaborating with kindergartens and elementary schools
: Through project-based learning aimed at forest environment education in the
general seminar of the Faculty of Education

白井 克尚・柿原 聖治・鈴木 順子・堀 建治・堀 篤実
Katsuhisa Shirai・Seiji Kakihara・Junko Suzuki・Kenji Hori・Atsumi Hori
愛知東邦大学教育学部

要 旨

本研究の目的は、保幼小接続・連携を担う保育士と教員養成の実践として、教育学部・総合演習において、年間を通じたフィールドワークによる「森林環境教育を目指した教材・教具の開発」といったプロジェクト型学習を行い、学生の感想記述の分析を通じてその成果を検証することである。本研究の成果は、以下の三点である。一つは、子どもの学びに対する保育士や教師支援への気づきが現れたことである。二つ目は、幼少期の子どもの実態についての気づきが現れたことである。三つ目は、森林環境教育の教材・教具の有効性についての気づきが現れたことである。したがって、本実践を通じて、保育所保育指針の5領域「環境」のねらいにある「身近な自然に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」ことへの基礎的な理解や、幼稚園教育における「環境を通して行う教育」の基礎的な理解、小学校入門期における「自然遊び」の重要性についての基礎的な理解を、それぞれ体験を通じて具体的に深めたと捉えることができる。

1. 研究の目的

本研究の目的は、保幼小接続・連携を担う保育士と教員養成の実践として、教育学部・総合演習において、年間を通じたフィールドワークによる「森林環境教育を目指した教材・教具の開発」といったプロジェクト型学習を行い、学生の感想記述の分析を通じてその成果を検証することである。

2017年に改定された『小学校学習指導要領解説生活編』では、生活科における成果と課題のさらなる充実を図ることが期待される点として、「幼児教育との連携・接続」に関わる内容があげられた。そこでは、「幼児期に育成する資質・能力と小学校低学年で育成する資質・能力とのつながりを明確にし、そこでの生活科の役割を考える必要がある」とされ、幼小接続の視点が重視された。すなわち、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿と、小学校低学年での

生活科において育成する資質・能力における「つながり」が重視されたのである。

そうした視点を踏まえれば、保幼小接続・連携を見据えた保育士と教員養成は、今後さらに重要な課題となるに違いない。しかし、教師教育学研究の分野においては、「連携・接続を学校や園の現場で担う教師の養成はどうあるべきか」という議論はほぼ置き去りにされてきた¹とされている。

このようなとき、保幼小接続・連携を担う保育士と教員養成のキーワードになりうるものとして、「森林環境教育」をあげることができる。なかでも、『保育所保育指針』では、5領域「環境」のねらいの一つとして「身近な自然に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」²ことが示されている。また、幼児期における「環境を通して行う教育」は、幼児教育の教育方法に関する中心的概念であることが指摘されている³。さらに、小学校入学までに経験させたい体験として「自然遊び」⁴の重要性も指摘されている。そのようにして「環境」を幅広く捉え、幼児期から小学校へと接続・連携して「森林環境」に触れさせることの重要性を位置づけることができる。この考えに基づき、保幼小接続・連携を担う教員養成のキーワードとして「森林環境教育」を導き出した。

本学教育学部では、保育士養成課程・幼稚園教職課程・小学校教職課程を併設し、幼保幼小接続・連携を踏まえた教員養成をおこなっている。上記の「森林環境教育」の視点を踏まえることにより、保幼小接続・連携を担う保育士と教員養成が可能になると考えた。そこで、本研究では、幼児教育コース（保育士養成課程・幼稚園教職課程）と初等教育コース（幼稚園教職課程・小学校教職課程）の全学生が含まれる教育学部・総合演習（学部2年生）の活動において、フィールドワークを通じた「森林環境教育の教材・教具の開発」をおこない、幼小接続を担う教師の専門性形成に資することをめざした実践に着手した。実践の成果については、学生によるフィールドワーク後の感想記述の分析を通じて、その効果について検証をおこなった。

2. 研究の方法

（1）調査方法の概要

本研究では、保幼小接続・連携を担う保育士と教員養成の実践を行い、学生による感想記述の分析を通してその効果を検証することを目的としている。実践の概要は、年間を通じて、教育学部・総合演習の授業においてフィールドワークを通じた幼小接続を目指した森林環境教育の教材・教具の共同開発を進め、学生が作成した教材・教具を活用した子どもを対象とした実践をおこなう。調査方法は、実践を通じた学生による感想記述を分析することにより、その成果を検証する。

（2）調査の対象者（学年・人数など）

調査対象：2022年度教育学部子ども発達学科の「総合演習Ⅰ」「総合演習Ⅱ」を受講している2年生学生（64名）を対象とする。

〈利害関係の回避策について〉

アンケートには成績とは無関係であることを説明し、アンケートを書くことに賛同しないことがその学生に不利がないことを口頭で説明する。また、アンケートの分析・抽出は、無記名でおこない、学生が特定されることのないように配慮する。

上記内容で利益相反を回避する。

（３）調査方法

年間を通じて、教育学部・総合演習の授業においてフィールドワークによる幼小接続を目指した森林環境教育の教材・教具の開発を進め、10月6～8日に開催されたSDGs AICHI EXPO 2022（常滑市・愛知県国際展示場「Aichi Sky Expo」）参加後に、学生に対して目的を説明し、アンケート用紙を配布した。

感想記述は無記名とし、データは機械的に処理し個人が特定されないことを説明した。協力を得られない場合も一切不利益を被ることはないこと、成績には全く影響しないことを口頭で説明した。

調査内容：自由記述として「森林環境教育の教材・教具を活用してSDGs AICHI EXPO 2022ブース出展をした感想」について質問する。

分析方法：アンケート調査の感想記述に関して、共同研究者の協議に基づいて特徴的な内容を選び、KJ法で分類し構成要素を抽出して考察を行う。

（４）調査の実施時期

2022年度は、教育学部・総合演習の授業において、通年でフィールドワークによる「幼小接続を目指した森林環境教育の教材・教具の開発」を進め、アンケートは2022年10月6～8日に開催されたSDGs AICHI EXPO 2022参加後に実施した。

3. 総合演習における森林環境教育を目指した教材・教具の開発

（１）Aゼミの活動

本節では、教育学部・総合演習の中でも、①A・Eゼミ（小学校教員希望学生が多く所属）②Bゼミ（幼稚園教諭希望学生が多く所属）③C・Dゼミ（保育士希望学生が多く所属）の活動を事例として、年間を通じた「森林環境教育を目指した教材・教具の開発」および実践の様子について具体的に述べていきたい。

① 長久手市・もりの学舎における森林環境学習

4月はじめに、教育学部総合演習全体のガイダンスにおいて、共同プロジェクトとして年間を通じた「森林環境教育を目指した教材・教具の開発」といったプロジェクト型学習を進めることについて話をした。開発する教材・教具は、各ゼミの専門性に合わせて自由に開発して良いこと、SDGs AICHI EXPO 2022において発表をするという一連の流れについて説明した。

2023年6月7日には、学外演習活動として、長久手市・もりの学舎に行き、森林環境教育について学ぶ機会を計画した。



写真 1：自然素材を使った工作体験

当日は、ガイドの説明のもと、「インタープリターと歩くもりのツアー」と「工作体験」の体験活動を行った。「インタープリターと歩くもりのツアー」では、ガイドの方からインタープリターの役割（自然学校やエコツアーなどで、自然の大切さやすばらしさを参加者に伝える人）や、長久手市周辺の東海丘陵地に生育している全国的にも珍しいフモトミズナラというどんぐりについての解説を聞いた。また、「工作体験」では、実際に森林の中まで行き、木の実・枝・落ち葉などの自然素材を使った「フォトフレーム」や「さわってちょう」の制作活動を行った。

学生たちは、幼少期の子ども達に、地域の森林環境に触れさせることの意味について考えた様子であった。そして、子ども達が楽しいと思えるような森林環境教育を提供することへの意識を高めていった。中でも印象的であったのは、ガイドの方による「幼少期においては、自然体験を通して感性の基礎的な部分を育みたい。それが環境教育につながる。」といった話であった。学生たちは、今後の森林環境教育の教材・教具の開発にヒントを得たようであった。

② 名東区・平和公園をフィールドとした生活科教材開発

前期には、ゼミにて本学に隣接する名東区・平和公園をフィールドとして森林環境教育の教材・教具の開発をおこなっていった。Aゼミでは、クリスマスリース作りやSDGsについての理解を深めるパンフレットの作成を行った。学生たちは、学外でのフィールドワークに、積極的に取り組んでいった。

2022年7月8日には、小学校教職課程の科目「生活」の授業において、平和公園探検を行った。学生たちには、教師の目線に立って、小学校低学年・生活科の学習材研究として、ポスター作成を課題としたプロジェクト型学習を行うことについて説明した。その際には、課題設定→情報の収集→情報の整理・分析→まとめ・表現といった「探究」のプロセスを提示し、グループで協力して活動することを呼びかけた。



写真2：名東区・平和公園自然探検

平和公園をフィールドとしたプロジェクト型学習では、各グループで協力して活動する様子が見られた。また、表現活動を取り入れたことで、プレゼンテーション能力の向上にも役立ったと考える。フィールドワークを通じて平和公園における森林環境の豊かさに気付いた学生が多く、幼少期の子ども達にそうした豊かな森林環境に触れさせることの意義についても理解を深めていった。

③ 森林環境教育をテーマとしたSDGs AICHI EXPO 2022への出展

2022年10月6・7・8日、常滑市の愛知県国際展示場（Aichi Sky Expo）で開催されたSDGs AICHI EXPO 2022に、教育学部総合演習で「幼小接続を目指した教材・教具の開発」というテーマでブース出展した。学生たちは作成した教材・教具を活用してブースの運営をおこなった。

ブースでは、クリスマスリース作りや工作体験など、参加した子ども達に丁寧に言葉がけをしながら活動を行っていた。工夫しながら子どもたちに積極的に関わる姿も見られた。学生たちにとってSDGsについて学びを深める貴重な機会にもなった。

2022年11月12・13日に開催された大学祭キッズ広場では、作成した教材・教具を用いて各ブースの運営を行い、子ども達と積極的に関わることができた。2023年1月18日には、ゼミ報告会として1年間の共同研究の成果を報告した。

年間を通じた教育学部総合演習におけるフィールドワークによるプロジェクト型学習の成果として、子ども達と関わりながら、教材・教具の開発を行うことができた点や、探究型の森林体験学習を進めることができた点などがあげられる。



写真3：EXPOブースでの活動の様子

(2) Bゼミの活動

① 名東区・平和公園への探索を通じた観察・発見の機会

身近な森林環境に触れるため、初夏の自然の観察（森林環境教育プログラムの準備）として、5月11日、18日、25日、6月1日のゼミの時間を利用し、平和公園を探索した。

身近な森林環境に興味・関心を持ち、観察する目的で平和公園の散策をした。多くの種類の葉や木の実（松ぼっくり、モミジバフウ、梅）、草花を観察・採取した。よく見かけたり身近に生えていたりする植物ではあるが、名前がわからないものについての調べ学習も行った（カモミール、ポプラなど）。



写真4：名東区・平和公園の探索の様子

② 長久手市・森の学び舎における森林環境学習の機会

2022年6月4日（土）に森の学び舎（愛・地球博記念公園内）のインタープリターと歩く森のツアーへ参加した。インタープリターの方から森林環境の現状（外来種が増えてきているなど）、生えている木の特徴や植物の名前の由来を聞いたりしながら散策をした。

また、お気に入りの木を見つけ名前をつけることで親しみを持ちながら森林に触れ合う体験をした。森の学び舎で子ども対象のワークショップを行っていることを聞き、自分たちがワークショップを実施する参考となる話も多く伺うことができた。平和公園や森の学び舎での活動を通して、学生からは「自然の必要性を知る」「環境に興味を持つ」「自然と触れ合うことにより、心が安らぐ」などの気づき・発見があった。



写真5：インタープリターと歩く森のツアー

③ SDGs AICHI EXPO 2022におけるワークショップの準備・実施

6月9日以降の前期のゼミの活動では、SDGs AICHI EXPO 2022（10月8日（土）13:00～14:30担当）に向けて、平和公園、森の学び舎で学んだことや収集した素材を生かしたワークショップを企画した。準備として、子どもたちに興味関心を持ってもらうため、チラシや松ぼっくりけん玉作成のパネルづくり、材料の準備をした。

当日の主な活動は以下の3つであった。①会場に来ている子どもたちにチラシを配り宣伝、案内をする。②集まった子どもたちに松ぼっくりけん玉の作り方を説明する。③完成した松ぼっくりけん玉の遊び方を説明する。この活動を通して学生に見られた様子は、意欲的に子どもに関わる姿が見られたことである。出展ブースは子ども達で溢れ、制作活動に対して声掛けや支援をしながら活動をしていた。



写真6：松ぼっくりけん玉の工作体験

④ 大学祭でのワークショップのブラッシュアップ

それまでの学び、SDGs AICHI EXPO 2022での体験を踏まえ、森林環境を活かした教材開発に関するワークショップとして大学祭キッズ広場の準備と運営（11月13日（日）午前担当）を行った。大学祭では、SDGs AICHI EXPOで子どもたちから好評であった松ぼっくりけん玉を、ブラッシュアップしワークショップを開催することとした。SDGs AICHI EXPO 2022での反省点を活かして、子どもたちがより一層楽しめるように話し合いを通じて、反省点と改善方法を出し合って取り組んだ。出された意見は、次の通りである。

資料1 学生から出された意見（△反省点 ⇒改善方法）

△スペースの都合もあり、松ぼっくりけん玉を作成する机の数が足りなかった。
⇒大学祭では机の数を増やす。
△制作方法を書いたパネルの設置場所が作成する子ども達からは見えにくい場所にあった。
⇒近くに置けるように段ボールを使い、立てかけられるようにした。
△ペンやシール等の備品が足りない。机によっては置いていなかった。
⇒各机に通り制作できるように材料を用意した。

以上のように様々な気づきから自分たちで改善点を話し合い、より良いものにする動きがみられた。ゼミ内の団結力が増し、時間の管理もできるようになっていった。大学祭では、机の数を増やし、さらに各机に作り方を教える人を一人以上配置することで、子どもたちにより丁寧に作り方を説明することが可能となった。また、ペンやシール等の備品を増やすことで、多くの子どもに対応することができた。

大学祭のキッズ広場では、SDGs AICHI EXPO 2022での



写真7：大学祭キッズ広場の様子

ワークショップに比べ多くの来場者があり、より多くの子どもたちと触れ合ったことにより、学生たちは子どもに関する新たな発見も多くあった。(例：作るもの一つひとつがユニークで個性的であった。それぞれの子どもがこだわりを持って作っていた。ひもを長くして難易度の高いけん玉を作成し松ぼっくりをコップに入れることに挑戦する姿が見られた、など) けん玉をあまり知らない子どもたちがおり、けん玉の遊び方を保護者を交えながら伝えることで、家族での交流のきっかけを作ることができたと子育て支援にもつながる手ごたえを感じている学生もいた。

⑤ 子どもが制作できる教材開発と現場に飾ることができる

教材開発

大学祭後は、これまで取り組んできた教材としての松ぼっくりを活かした季節にあった教材研究に取り組んだ。子どもが制作できる作品や園などで飾ることのできる季節を感じられる作品をテーマに制作を行った。子どもが制作できる教材開発と、保育・幼児教育や初等教育の現場に飾ることで森林環境に触れることができる教材開発の二つをテーマに取り組み作品作りをした。

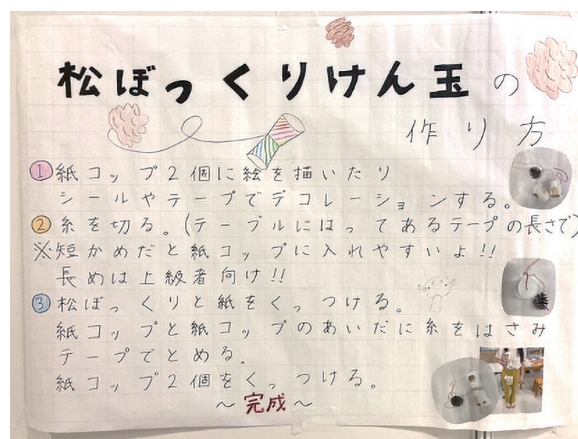


写真8：松ぼっくりけん玉のポスター

資料2 学生が取り組んだ教材開発 (*活動内容 ○教材 ◇注意した点)

*子ども(幼児や児童)が制作できる教材開発

○クリスマスツリー、リース

◇松ぼっくりの形状を活かし、ビーズやリボン等で飾り付けをする。

◇自然素材を活かす目的で、リースの土台はさつまいものつるを使って制作をした。

◇色付けについても環境にやさしいミルク原料を使用したミルクペイントを使用した。

*現場に飾ることで森林環境に触れることができる教材開発

○クリスマスをモチーフにした置物、モビールの制作

◇木材の端材を活用しクリスマスをイメージできるような置物を作成した。

◇形や色に工夫を凝らした。

1年のゼミ活動を通して、学生からは以下の感想があった。

資料3 学生の感想「1年間のゼミ活動を振り返って」

幼児期から自然に慣れ親しむことは、五感を刺激し、好奇心を育むため、感受性が豊かになると感じられました。また、自然を大切にする心や、自然の中で友達と遊ぶことでコミュニケーション能力を伸ばすのではないかと考えました。私達が、保育者になったら、積極的に自然遊びを取り入れて、子どもと一緒に新たな発見や感動を味わいたいと感じました。

このような感想からは、学生が年間を通じた森林環境教育をめざした教材・教具の開発により、幼児期に自然遊び

に触れさせることの重要性や、教材・教具づくりの面白さ、子どもと遊ぶことの大切さに気付いた様子がわかる。

（３）Cゼミの活動

① SDGs AICHI EXPO 2022に向けてのワークショップの準備

前期のゼミ活動では、SDGs AICHI EXPO 2022に向けて、計画し、準備をした。学生にワークショップで何をしたいかを尋ねたところ、しおり作りや工作、クイズ等といった意見があり、これらを行うことにした。

草花のしおりについては、学生自身が採取した草花を押し花にし、それをラミネーター専用フィルムに挟み、リボンをつけ、子どもが喜んでくれるように工夫をした。どのようにすればきれいな押し花ができるのかを考えたり、子どもがしおりを触った時に危なくないように、フィルムの直角を丸くなるように切ったりして工夫していた。また工作に関しては竹とんぼに子どもが色付けをし、自分なりの竹とんぼができるようにした。学生も実際に竹とんぼに色付けをした後、竹とんぼを飛ばして遊ぶ姿がみられた。クイズは小学生対象と幼児対象のクイズ内容をそれぞれいくつか考え、当日、子どもたちにそれを読んで答えてもらうように紙に書き準備をした。当日、子どもがクイズの答えを考え、答えることができたなら、草花のしおりをプレゼントすることを学生が考えた。



写真9：草花のしおり作りの様子

② SDGs AICHI EXPO 2022におけるワークショップの実施

SDGs AICHI EXPO 2022における当日の活動は、①子どもとクイズをし、草花のしおりを渡す。②子どもと一緒に竹とんぼ（工作）の援助であった。その他、親子連れに宣伝、案内を行った。親子連れでクイズを楽しむ姿や工作を楽しむ子どもの姿がみられた。

①子どもとクイズをし、草花のしおりを渡す。②子どもと一緒に竹とんぼ（工作）の援助の活動では、学生自身も準備段階から保育者の目線で子どもへの関わりを考えながら、実践できたように思う。当日の子どもへの声掛け、援助についても、今後への自分自身の学びの一助となったのではないかと考える。



写真10：ブースでの工作体験の様子

（４）Dゼミの活動

① 保育教材の作成及び開発とその実践力の向上

①について、主に子ども（乳幼児から小学生まで）を対象としたペープサート（紙人形劇）とパネルシアター（不織布を素材とする人形劇）の作成することとした。両者ともに保育現場では主力となる保育教材である。両教材ともに作成にあたって相当の時間を要することから、前期の早い段階（5月上旬）から製作を開始した。また作成するだ

けでなく、演ずるための練習時間も必要となるため、学生に対して製作期限を7月上旬に設定した。作品数について、ペープサートは5作品以上、パネルシアターについては3作品以上作成することを課した。これは保育現場で実践する際、1ないし2作品では不十分であることと、前述のとおり作品作成にかかわる時間が相当費やされるためである。そのうち今回は森林教育や自然をモチーフとする作品を1ないし2作品含めることを条件とした。

② 森林環境教育に関するフィールドワーク

②では学生の自然体験を増やす目的として、本学の隣にある平和公園へ出かけた。幼児教育では環境を中心とする保育が重要とされることもあり、学生自身の身近な環境である平和公園となった。平和公園では園内を散策し、自然そのものを感じることを主眼とした。さらにその体験を踏まえて、環境に対する学びをさらに深めるとともに、自然内での活動を実践的にとらえるために愛・地球博公園内にある「もりの学舎」にてフィールドワークを実施した（6月23日実施）。「もりの学舎」は主に小学生・中学生向けの団体プログラムを提供する施設であるが、大学生の受け入れもされていることと、多様な自然体験プログラムを提供する貴重な施設である。「もりの学舎」ではインタープリターと称される森の案内人のもと、森の散策を行った。その途中、タープリターから出される様々なテーマをグループで考えながら、学生は自然との触れ合いを楽しんだ。

③ 各種イベントの企画と運営

③は①、②での成果を踏まえて、学生の実践力を高めるべくイベントを企画し、実際の運営にあたった。アで作成した作品が完成し、前期最終講義時に自身が演ずる姿を動画にて撮影した。演者である学生への気づきを促すために、ゼミ内で動画を確認、共有した。動画視聴後はどこがよかったのかを演者に対して学生全員が発表した。撮影した動画は10月開催の「SDGs EXPO AICHI 2022」での本学ブースにて上映した（10月7日午後担当）。保育や幼児教育では新型コロナ下であっても対面が重視されており、次は実際の子どもの前で演ずることを主眼として準備に入った。発表の場として、本学大学祭で企画されている「キッズ広場」で1コーナーとして「こども劇場」を開催し、来場した子どもの前で演ずることとなった（11月12日午後担当）。その前段階として、自身の力量を高めることを話した。作品を再度確認するとともに、学生同士で作品の演じ合いを行った。さて当日の「こども劇場」はおおよそ1時間に1回のペースでペープサートやパネルシアター、紙芝居を演じた。新型コロナウイルス感染予防を徹底しての大学祭であり、来学者は例年よりも少なかったが、「こども劇場」も毎回7人前後であった。来学者へのアンケートは行っていないため、満足度はわからないものの、そのなかでも学生は自分たちの作品を熱心に演じていた。本イベント後の11月後半には幼児教育コースの学生は初めての保育所実習が控えていることもあり、幼児教育コースの学生を中心に発表も熱がこもったものと推察される。

④ 学生はどのように活動していたか、どんな成長が見られたか

保育教材の作成にあたっては、まず教員から作成方法を提示して、テーマについては個人の裁量に委ねることを学生に伝えた。保育教材作成はグループではなく、個別活動とした。その理由としてグループ活動が中心となると勢い特定の人物に負荷がかかる可能性があることに加え、個々人の教材作成力の低下を招くことが危惧されるためである。学生とはテーマの選択を含めて、個別面談で対応し進捗確認を行った。作品づくりが得意な学生もいれば、苦手な学

生もあり、面談を通じて温度差を感じられた。保育教材でもとりわけパネルシアターは作成にかなりの時間を費やし、その点は教材作成における学生の負担感の一因となっている。

さらに教材作成後は、それらをどのように演ずるか、ある程度の練習が必要となってくる。練習では作品内容によって歌が入るものならば歌の歌詞やメロディー、物語ならばストーリーやキャラクターの演じ方、さらに作品の導入からまとめのしかたなど、多岐わたる準備が必要となる。それらも個人で行うことで保育教材のあり方をトータルで考え、学生自身が準備の重要さを意識することが重要であることを意図している。教員の予測どおり、学生の温度差は認められた。前期終了前に自身が作成した作品を演ずる様子を動画撮影したものを確認すると、明らかに念入りに準備している学生と「ぶっつけ本番」の学生は明確となり、その動画を用いて後期最初のゼミで、全員で視聴して意見交換を行った。前述のとおり、用意を周到にした者とそうでない者が動画により明確になるため、否が応でも学生自身の気づきを促す結果となる。教員が直接、指導するよりもはるかに効果的である。動画視聴から1週明けて、今度は全員の前で作品を演じ、コメントを交換することで、それぞれの技術力向上を図った。その場では教員が準備した評価表を用いて学生同士で相互評価を行った。自由記述のコメント欄には発表者の悪いところを指摘するのではなく、よいところ、持ち味を記入することを教員から伝えた。評価表は教員が確認することなく、発表者へ直接渡すことで、当事者のみが評価内容を知る方法をとった。教員は発表後に技術面のみの助言を学生に行った。このように学生個人が持つ保育教材への力量を高めるために、学生同士で高め合うことを意識していくことが学生の主体性を育むうえで重要となる。この点は学園祭での「子ども劇場」の運営につながり、グループで保育教材の相互発表やプログラムの展開を検討することにつながっていった。森林教育にかかわらず、学生が主体的にさまざまなことに取り組んでいくことは、将来、小学校教諭や保育者をめざす者にとっては避けて通ることができない。

前述したように、すべての学生が主体的に取り組むことができるわけではない。総合演習という小集団のなかで学生相互気づき合い、高め合うことによってその気持ちが育まれていくのである。それゆえに我々、大学教員には学生同士がそれぞれ高め合えるような環境づくりがなお一層求められるのである。

④ 開発した幼小接続を目指した森林環境教育の教材・教具について

学生には森林環境教育とは何かを提示することなく、どのようなことを子どもに伝えたいかを考えながら教材作成するように伝えた。その悔過、学生が作成した森林環境教育に関わる教材は以下のとおりである（カッコ内の数字は複数が作成）。

表1 学生が作成した森林環境教育に関わる教材

	ペープサート	パネルシアター
作品名	<ul style="list-style-type: none"> ・葉っぱクイズ ・山の音楽家（5） ・木の葉動物かくれんぼ ・大きくなったら何になる ・地球の環境 ・災害と防災グッズ ・あめふりくまのこ（2） ・シルエットクイズ（季節の植物や動物） ・チューリップ ・お花が枯れちゃった ・風船のうた ・木の後ろにいるのはだれ？ ・この食べ物どこにできる？ ・みずのたび ・動物シルエットクイズ ・ゆき ・トンボのメガネ ・森の中で動物がかくれんぼ 	<ul style="list-style-type: none"> ・山の音楽隊 ・水の循環 ・旅人とプラタナスの木 ・コロコロたまご ・ぞうさん ・カラスとキツネ ・3びきのこぶた ・森のお布団 ・静かな湖畔 ・金のおの銀のおの ・森のくまさん ・さんぽ ・おはながわらった ・チューリップ ・おつかいありさん ・きのこ ・むしの声

本表からわかるように、学生がとらえる森林環境教育が多様である。この多様性こそ、森林環境教育の核となるものである。たとえばパネルシアターで「3びきのこぶた」が挙げられているが、一見すると森林環境教育とのつながりは見られない。これを選択した学生は本作品では「わらの家」や「木の家」といった自然物が出てくることから、幼児が物語を通じて、無意識のなかに自然を感じることができるのではないかと語っていた。幼児教育でいうところ環境とは、自然だけでなく、ヒトやモノ、文化的なものなど、は様々な事象や事柄を指している。そしてそれは身近なものであり、ブタであれ、木であれ、レンガであれ、子どもにとっては身近なものである。これら教材の多様性は学生自身が森林環境教育を多様的にとらえているという証左でもある。

（5）Eゼミの活動

① 平和公園の散策

平和公園にはゼミの全員で3回行った。他の公園と違い、ここの公園はほぼ手付かずの自然があり、季節の草花を目の当たりにした。途中5、6人の園児と保育士に出会うこともよくあった。同じように春の草花を楽しんでいることが分かった。草花の写真を撮って、ネットでその名前を検索した。

② 樹木へのメッセージの花

SDGs AICHI EXPO 2022では樹木を模した用紙に各自のメッセージを書いてもらい、メッセージの花を咲かせた。小学生は将来の夢などを書いてしたが、大人はウクライナの停戦を祈るものがあった。外国人も参加してくれ、この樹木にメッセージを残してくれた。だんだん、メッセージの花が咲いていくのが面白かった。



写真11：樹木へのメッセージの花

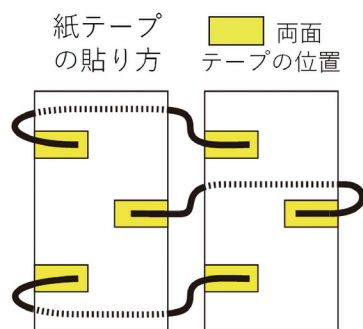
③ 身近な物を使ったおもちゃ作り（１）

森林環境教育の一環として、かまぼこ板を使った。学生に自分達でかまぼこ板をたくさん集めさせ、「板返し」を作らせた。別名、「パタパタ」や「団十郎のからくり屏風」とも呼ばれているものである。学生がこのおもちゃの動きからイメージした物を、色づけや描画を施して、板返しに装飾を各自加えていた。

この「板返し」を１つ作るのに10枚の板が必要になる。集めるのに時間がかかるし、作り方が複雑なので、この前にまず、２枚でできるものを作った。それが、日常製品としてある「左右両開きの冷蔵庫」である。このドアの仕組みを考えさせた。これなら構造が簡単で、少し考えれば、解決できる課題である。どこに糊を付ければよいかを考えさせ、試行錯誤させ、完成させた。その後、それを連ねていき、板返しを作った。

④ 身近な物を使ったおもちゃ作り（２）

ペットボトルを使った水の移動のおもちゃを作り、大学祭で展示した。小学生は、水が落ちてこないことに驚いていた。それから、上のボトルを回すと、水が渦を巻いて落ちてくる。来場者は何度も上下を逆さにして遊んでいた。



左右両開きの冷蔵庫の仕組み

図１：身近な物を使ったおもちゃ①



水の移動と渦巻き

図２：身近な物を使ったおもちゃ②

4. 森林環境教育を目指したプロジェクト型学習の効果検証

本節では、教育学部・総合演習学生によるSDGs AICHI EXPO 2022参加後の感想記述の分析を行い、実践の成果について検証を行った。調査時期をSDGs AICHI EXPO 2022参加後としたのは、研究の方法でも述べたように、学生の変容過程が明らかになると考えたためである。

そこで、学生の感想記述の中から特徴的な内容に絞り、実践の成果の検証を行った。分析の手続きは、アンケート調査の感想記述に関して、共同研究者の協議に基づいて特徴的な内容を選び、K J 法で分類し構成要素を抽出して考察を行った。

表2 SDGs AICHI EXPO 2022参加後の学生の感想および構成要素

学生の感想	構成要素
私は初対面の人と喋ることが苦手です。ですが、将来先生になる際には、コミュニケーション力が必要不可欠となってくると思うので、ブースに沢山の子どもが集まれるよう呼びこみをしました。「また、後で行きます。」と言う人もいましたが、「やってみたい、気になる」といった興味を示す子どもが多く、SDGsに関心のある子どもが多い印象でした。たくさんの子どもたちがブースに集まったときは、大変嬉しかったです。少し苦手を克服することができたと思います。また、教えるときには、1から教えずに自分で考えて作っている子どもが多く、大変驚きました。教える力は勿論大切ですが、笑顔などの表情や態度といったスキルも大切であると改めて感じました。	A. 子どもの学びに対する支援についての気付き
SDGsと関連付けて自然のものを活用した紙コップけん玉やリース作り体験では、イベントに来た子どもたちとより深く関わることができました。ブースを担当して気づいたことは、 <u>子ども自身もSDGsに目を向けているということです</u> 。実際は紙コップけん玉を制作する際に、紙コップにSDGsのマークをペンを使って表現する子がいたり、毎年イベントに来る子がいたり人によって感じ方・考え方は異なり、子どもたち自身も遊びを通して楽しく学び続けているのだなと思いました。また、子どもたちは制作に対して一心に取り組んでおり、紙コップ同士を貼り合わせることは勿論、松ぼっくりに毛糸を巻きつける際に、子どもの能動的な学びを見守るのか、それとも援助をするのかなど、それらのバランスは自分が思っていたよりも難しいものであると感じました。	B. 幼少期の子どもの実態についての気付き A. 子どもの学びに対する支援についての気付き
いつもは、名古屋市のいきいきサポーターで小学生と関わることは多くありましたが、幼稚園児や保育園児との関わりは、あまりありませんでした。今回ブースを担当して、コロナ禍でもありました、とても貴重な体験ができました。松ぼっくりけん玉やリースを作る中で、子どもたちが自分自身の思っていた行動をとったりするので、とても大変でした。私は、外まわりの呼びかけは行っていなかったけど、ブース内で自分の役割は果たせたかなと思いました。今回行ったブースはとても小さかったので、工夫すれば、作業スペースがもっと確保できたかなと思いました。片付けもできたので、ブース出展の大変さも分かる良い機会でした。	B. 幼少期の子どもの実態についての気付き
僕の担当した時間は子どもが少なかったのですが、女の子2人と時間ギリギリまで一緒に工作していました。妹ちゃんの方は、最初あまり心をひらいてくれなくて、どうしようかと考えていたのですが、積極的に話しかけているうちに、「この色がいい」や「〇〇が好き」と返答が返ってきて、少し仲良くなったと思います。また、紙コップけん玉やリースといった様々な種類の遊びがあるので、子どもたちもワクワクしながら、どれを作ろう、どの材料を使おうと楽しめると感じました。	C. 森林環境教育の教材・教具の有効性についての気付き
かなり狭いスペースだと聞いていたが、思ったよりも広くて活動がしやすかった。子どもたちは作業に入ると口も利かず、夢中になってくれたので、初めは楽しいかな？と不安に思っていたが、完成した後は、楽しそうに遊んでいたのが安心した。幼稚園児の子どもたちには、紙コップけん玉の一部の工程が少し難しかったように感じたので、自分のゼミの案ではないが、もう少し工夫があった方が良かったかなと思った。自分たちのブースは、なかなか大人の方が来てくれなかったのも、もっと幅広い世代の人に来てもらうための工夫が必要だったなと感じた。	C. 森林環境教育の教材・教具の有効性についての気付き
私は、ブースを担当する中で2つの役割をしました。まず1つ目は、ブース内で来てくれた子どもたちをサポートしながら一緒に工作をする役割です。ボランティアで何度か子どもと関わる機会がありましたが、工作のサポートは初めてだったので、どこまで子どもたちに作らせて、どこをサポートするのが正しいのかという点で難しさを感じました。この役割では、良い経験ができたと感じました。2つ目は、呼び込みをしました。呼び込みは大人(保護者)の方に話しかけることが多かったため、コミュニケーション能力を少し向上させることができたと思いました。	A. 子どもの学びに対する支援についての気付き
当日になってやることが変わるというハプニングはあったものの、参加してくれた人も多く、概ね良かったのではないかなと思っています。 <u>また、小さい子達と関わる機会はなかなか無かったので、ブースを担当して関わる機会がもてたので、楽しかったです。その上、来て下さったお子さんはもちろんですが、その保護者の方にまで喜んでいただけたのが本当に嬉しかったです。もしまた同じような機会があれば、対応をよりがんばりたいなと思いました。(今回は前半で消極的だったため)</u>	A. 子どもの学びに対する支援についての気付き
ブースを担当して感じたことは、僕は最後の方のブースの時間帯だったので、子どもが少なくして少し暇でした。ですが、何度か子どもが来てくれて、何回か話しましたが、年齢よりもしっかりとした子や、元気な子や静かな子などがいて、改めて子どもの成長には差があったり、様々な性格の子どもがいたりするのだと思いました。	B. 幼少期の子どもの実態についての気付き
今回のブースは、自然のモノを活かした工作(リース、紙コップけん玉)で、主に子どもと一緒に工作を行う時間が多かった。そんな中、 <u>子どもに物事を教えるという勉強を行っているも、なかなか実際に接する機会が少なく、はじめは上手く伝える方法を手さぐりで行っていたが、段々と自然に話ができ、子ども達側からも積極的に話してくれた事が印象的だった。</u>	C. 森林環境教育の教材・教具の有効性についての気付き

はじめは子どもが来るかととても不安でしたが、思った以上に子どもがいて、ブースにもとても子どもが集まってくれたので今まで準備をがんばって良かったと思いました。まつぼっくりけん玉を作る時に紙コップ同士をテープで貼り付ける作業や、まつぼっくりをひもに付ける作業に子どもが苦戦していたので、一緒に手伝いながら作りました。けん玉が完成するとみんなとても楽しそうに遊んでくれたので嬉しかったです。	C. 森林環境教育の教材・教具の有効性についての気付き
ブースを担当して、子どもたちと久しぶりに関わることができて楽しかったです。初めはなかなか子どもが来てくれないかと思っていましたが、3人の男の子が来てくれ、まつぼっくりけん玉に興味を持ってくれました。5歳ぐらいのお兄ちゃんの方は、早く作り終わり、けん玉を楽しんでくれました。2歳ぐらいの弟の方は、シールで貼ることを楽しんでくれて、けん玉はほとんど遊んでくれませんでした。また弟の方は、作り方を話していても難しそうにしたり、好きなことしかやらなかったりしたことで、3歳ぐらいから向けの教材・教具だったかなと感じました。年齢によって楽しみ方が異なり、発達を見れて良かったと思いました。	B. 幼少期の子どもの実態についての気付き
今回実際にブースを担当して、子どもに説明することの難しさを改めて感じました。人見知りしてしまう子や、こだわりが強くずっと絵を描いている子など様々な子ども達が会場にはいました。子ども達一人ひとりに合った説明の仕方や関わり方を見つけることにとても苦労しました。子どもたちが工作に主体的に取り組めるように、できる限り手を貸さずに見守ることを心がけて子どもと関わっていました。松ぼっくりを利用してけん玉を制作したことで、子どもが自然に目を向けるきっかけ作りをすることができたと思います。今回のSDGsでの学びを大学祭に活かしたいと思いました。	A. 子どもの学びに対する支援についての気付き
今回ブースに参加し、様々な子どもたちと接する機会がありました。そこで私は、子どもの集中力にとっても驚きました。一人の子どもは、1時間近く絵を描くことに集中しており、また、絵を描くのはすぐに終え、シールを貼り出してけん玉で遊んだり、一人ひとりが自分の思う遊び方をしていました。とても勉強になったと感じました。	B. 幼少期の子どもの実態についての気付き
子どもに声をかけたりして、たくさん子どもたちに来てもらえました。目の前で楽しそうに黙々と制作を行う子どもたちを見たら、この機会ができてよかったと感じました。たくさん子どもたちが来てくれた時に、なかなか全員に目が行き届かなく、教えるのが遅くなってしまうことが何回かありました。そのような時に誰か手が空いている人が対応できたら良かったと思いました。	A. 子どもの学びに対する支援についての気付き
松ぼっくりけん玉をブースで一緒につくろうという企画に取り組みしました。これはゼミ内でSDGsの展示の案を出した際に私が出した松ぼっくりけん玉が選ばれ、これを中心として行いました。子どもから大人まで簡単に作り遊べ、松ぼっくりを使用し自然の材料を用いて行えることがとても利点だと思いました。なお、当日は子どもたちが来てくれて繁盛でき、みんな笑顔で楽しく松ぼっくりけん玉で遊ぶことができていたので、良かったと感じました。	C. 森林環境教育の教材・教具の有効性についての気付き
「なぜなぞ」「しおり」「竹とんぼ」に子どもたちは楽しんでいました。大人の方まで楽しんでいました。子どもたちの喜んでいる姿を見て、がんばって「しおり」や「なぜなぞ」を作って良かったと思いました。「なぜなぞ」や「しおり」など、子どもたちは楽しいものが好きなんだと感じました。	B. 幼少期の子どもの実態についての気付き
私は主になぞなぞに正解した人達にしおりを配る担当をしました。なぜなぞは、幼児向け、小中学生向けというレベルに分けてなぜなぞをみんなで製作しました。なぜなぞは来てくれた子ども達の年齢にあわせて出題しました。小学校低学年の子ども達に簡単ななぜなぞを出題してみたら、その子は簡単に答えてくれたので、せっかくならということで、難しいなぜなぞに答えてもらいました。難しいなぜなぞでは苦戦していたので、ヒントをあげたことで、正解することができました。子どもは本当に頭がやわらかいと感じました。逆に私は、なぜなぞに答えていこうと思っても頭が固くなってしまい、全然答えることができませんでした。子どもはなぜなぞに正解できたらうれしそうにしおりをもらっていて、しおりを何個も作ってよかったという気持ちになりました。	B. 幼少期の子どもの実態についての気付き
竹とんぼに子どもたちが楽しそうに色ぬりしているときも、遊んでいるときも保護者の方々が立ちっぱなしだったので、座って待てるブースを用意したり、遊ぶのは家に帰った後や公園などで遊んでねと声をかけるべきだったと反省しています。また、途中子どもが沢山集まったときに、手いっぱいになってしまったので、普段から大人数を相手している保育士さんはすごいなと改めて思いました。	A. 子どもの学びに対する支援についての気付き
私は、幼児向けのなぜなぞを出したり、竹とんぼを作ったりしました。なぜなぞでは、子どもに聞いてもらうように文を読んだら、そのなぜなぞの答えを必死に考えようとする子どもの姿が見られました。正解したらとても喜んでくれ、景品の手作りのしおりをあげると、どの花にしようかと沢山悩んでいました。竹とんぼは、室内で飛ばすとケガにつながるので外で飛ばすように伝えました。子どもは、自分の好きなように竹とんぼに絵を描いてました。	A. 子どもの学びに対する支援についての気付き
私たちのブースでは、「クイズ」と「竹とんぼづくり」を行いました。たくさん子どもが私たちの活動に興味を持ってくれて、いろいろな子どもと関わることができました。子どもと久しぶりに関わったので、初めはどう関われば良いか分かりませんでした。ですが、何人かの子と話をしたり、関わっていったりするうちに、緊張も解け、有意義な時間を過ごすことができました。みんなに無地の竹とんぼを渡し、「好きなように絵を描いてね」と伝えたところ、ドクターイエローを描いている子や好きな食べ物を描いている子など、それぞれが、自分自身の好きなようにデザインをしていて、見ていてとても面白かったです。	A. 子どもの学びに対する支援についての気付き

SDGsのイベント、会場に入ってまず思ったことは、自分が想像していた以上に人が多かったということでした。子どもから大人、外国の人もいて、様々な人と接することができました。 <u>今回、自分のゼミのブースでは、キネティックサンドを触って楽しむ子どもたち、自分の願いを紙でできた葉に書いて貼ってくれる人たちがいて、とても嬉しかったです。</u>	C. 森林環境教育の教材・教具の有効性についての気付き
<u>ゼミの人とブースを担当することも初めてのことだし、子どもと関わる場でもあって緊張したけど、子どものする行動や発言をその場で観察し、この発言をしたら、この子はどのように返してくれるかなど自分で判断して子どもとのコミュニケーションを取ることができました。そして、砂遊びでは、楽しそうにお団子を作る子もいれば、真剣に頑丈なお団子を作る子もいて、それぞれの個性を感じました。また親御さんとも会話をする機会があり、咄嗟に対応することができました。</u>	A. 子どもの学びに対する支援についての気付き
今回、ブースを担当したときに一番感じたのが、当たり前なのですが、来ていただいた方がみなさんSDGsに関心があるのだということでした。SDGsに関する質問をたくさん投げかけていただいたのですが、思っていることを上手く返すことができず、悔しい思いをしました。また、 <u>ブースを出展するのはとても不安だったのですが、たくさん子どもたちが立ち寄ってくれて嬉しかったし、安心しました。帰り際に「楽しかった」と言ってくれたのが、一番嬉しかったです。</u>	C. 森林環境教育の教材・教具の有効性についての気付き
私たちのゼミでは、色々な葉っぱの形に願いや目標などを書いてもらい、みんなで大きな一本の大きな木を完成させようというものと、室内で遊べる砂を持っていき、ブースを担当しました。ブースに来てくれた方へ上手く説明できているのか分からず不安になりました。しかし、 <u>最初に小学生くらいの子達が来てくれて、楽しそうに願いや目標を書いてくれたり、楽しそうに遊んでくれたりしたので、良かったと感じる場面もありました。子どもだけではなく、大人の方も書いてくれる方がいらっしゃったので、良かったと思いました。小学生だけではなく、幼稚園やもっと小さい子も興味をもって来て、書いてくれる子もいたので嬉しかったです。今回はいい経験ができたと思いました。</u>	B. 幼少期の子どもの実態についての気付き

(下線部は筆者)

これらの感想記述からは、次の三つの構成要素を確認することができる。

一つは、A. 子どもの学びに対する支援への気付きが表現されていることである。具体的には、「子どもの能動的な学びを見守るのか、それとも援助をするのかなど、それらのバランスは自分が思っていたよりも難しいものであると感じました。」「教えるときには、1 から教えなくても自分で考えて作っている子どもが多く、大変驚きました。教える力は勿論大切ですが、笑顔などの表情や態度といったスキルも大切であると改めて感じました。」「子どもたちが工作に主体的に取り組めるように、できる限り手を貸さずに見守ることを心がけて子どもと関わっていました。」などというように、自分なりの支援を模索する様子や、学びに関して「教える」―「支援する」ことへのジレンマについて考えている様子も見受けられた。

二つ目は、B. 幼少期の子どもの実態についての気付きが表現されていることである。具体的には、「子ども自身もSDGsに目を向けているということです。」「子どもたち自身も遊びを通して楽しく学び続けているのだなと思いました。」「3 歳ぐらいから向けの教材・教具だったかなと感じました。年齢によって楽しみ方が異なり、発達を見れて良かったと思いました。」などというように、幼少期の子どもの発想の豊かさや遊び・学びの関係性に目を向けている学生の様子も明らかになった。

三つ目は、C. 森林環境教育の教材・教具の有効性についての気付きが表現されていることである。具体的には、「紙コップけん玉やリースといった様々な種類の遊びがあることで、子どもたちもワクワクしながら、どれを作ろう、どの材料を使おうと楽しめると感じました。」「幼稚園児の子どもたちには、紙コップけん玉の一部の工程が少し難しかったように感じたので、自分のゼミの案ではないが、もう少し工夫があった方が良かったかなと思った。」「子どもから大人まで簡単に作り遊べ、松ぼっくりを使用し自然の材料を用いて行えることがとても利点だなと思いました。」などというように、森林環境教育の教材・教具の作業の難しさや利点について考えている感想があった。

したがって、年間を通じた「森林環境教育の教材・教具の開発」のプロジェクト型学習の成果の一端として、幼児教育における「環境を通して行う教育」の基礎的な理解や小学校入門期における「自然遊び」の重要性についての基

礎的な理解を、実践を通じて深めたと捉えることができる。このことは、保幼小接続・連携を担う教師にとって必要な視点であるといえよう。

5. 研究の成果と課題

本研究の目的は、保幼小接続・連携を担う保育士と教員養成の実践として、教育学部・総合演習における年間を通じたフィールドワークによる「森林環境教育を目指した教材・教具の開発」といったプロジェクト型学習の実践を行い、学生の感想記述の分析を通じてその成果を検証することであった。本研究の成果として以下の三点があげられる。

一つは、子どもの学びに対する教師支援への気付きが現れたことである。秋田喜代美は、「5歳後半の時期を接続期前期として、保育の質の更なる深まりを検討すること、小1初めの時期や低学年を接続後期として、両者の接続期を、活動内容、活動集団の組織の仕方、環境設定、教師のかかわりなどを幼小両者の教師が意識してみることが大事」⁵と述べている。本実践のように、幼小接続を担う教員の養成において子どもの学びに対する教師の支援について「活動内容、活動集団の組織の仕方、環境設定、教師のかかわりなど」の視点から発達段階に合わせたその在り方を継続して考えさせていくことが重要である。

二つ目は、幼少期の子どもの実態についての気付きが現れたことである。長年、幼児教育に携わってきた津守真は、「一つ一つの具体的な場面で、子どもの行動を、慣習的な大人の目で見えることを意識的に止めて、子ども自身の表現として見る」ことを課題とする実践こそが「子どもが主体として生活する場」を創造できると主張している⁶。本実践で現れた学生の子どもの実態への気付きは、未だ未熟なものではあるが、「子ども自身の表現としてみる」経験を積み重ねていくことが、幼小接続を担う教員の資質として重要であることは間違いない。

三つ目は、森林環境教育の教材・教具についての気付きが現れたことである。木村吉彦は、「幼児期から児童期への発達の継続を大切にし、その『連続性に基づくカリキュラム作成』、つまり登校意欲を高めることで学習意欲の高まりまでつなげるカリキュラムづくりによって、新入児童の『適応』を促すのが『接続期カリキュラム』」であることについて述べている⁷。本研究で作成した森林環境教育の教材・教具は、「接続期カリキュラム」の学習材の一つとして幼児期から児童期への学びを接続させることにつながると確信している。

したがって、本実践を通じて、保育所保育指針の5領域「環境」のねらいにある「身近な自然に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」ことへの基礎的な理解や、幼稚園教育における「環境を通して行う教育」の基礎的な理解、小学校入門期における「自然遊び」の重要性についての基礎的な理解を、それぞれ体験を通じて具体的に深めたと捉えることができる。これらの視点は、幼小接続を担う教師にとって必要な視点であり、今後も学生が研究や実践を通じて試行錯誤しながら獲得していくべき視点だと考える。

なお、本実践では、幼小接続・連携を担う保育士と教員としての資質・能力に関しての具体的な検討を行うことができなかった。この点は、今後の課題としたい。

【付記】

本研究は、一般財団法人角文・鈴木環境財団 令和3年度（第1回）助成「幼小接続を目指した森林環境教育のプログラム開発」（研究代表者：白井克尚）の研究成果の一部である。なお、本研究に際し、愛知東邦大学研究倫理委員会による研究倫理審査を受け、承認を得ている（愛東研第202209号）。

【注】

- 1 浅野信彦「幼児教育と小学校教育の連携・接続を担う教員の養成」『日本教師教育学会年報』第31号，2022年，p.76
- 2 厚生労働省『保育所保育指〈平成29年告示針〉』フレーベル館，2017年，p.40
- 3 酒井朗「教育方法からみた幼児教育と小学校教育の連携の課題—発達段階論の批判的検討に基づく考察—」『教育学研究』第81巻4号，2014年，pp.384-395
- 4 菅沼敬介「小学校入学までに幼児教育領域『環境』で経験させたい自然遊びに関する研究—幼保小の円滑な接続を目指す生活科教育の視点から—」『福岡教育大学紀要』第71号，2022年，pp.125-137
- 5 秋田喜代美「接続期の遊びと学び」『幼稚園じほう』33（10），全国国公立幼稚園長会，2005年，pp.5-11
- 6 津守真『保育者の地平—私的体験から普遍に向けて—』ミネルヴァ書房，1997年，p.220
- 7 木村吉彦『育ちと学びをつなぐ「幼保小連携教育」の挑戦 実践接続期カリキュラム—長野県茅野市発』ぎょうせい，2016年，p.23